

事務局：〒141-0031 東京都品川区西五反田1-13-7 マルキビル

電話 / FAX : 03-5740-9505 e-mail : 最後のページ参照

日本教育工学会ホームページ <http://www.jset.gr.jp/>

ISSN 1340-9913

日本教育工学会第25回全国大会の御礼

大会実行委員会委員長 山内祐平（東京大学）

日本教育工学会第25回全国大会が、平成21年9月19日から21日の日程で東京大学本郷キャンパスにおいて開催されました。おかげさまで1,020名の参加者をお迎えし、盛会の内に無事終了することができました。ご参加いただきました会員の皆様に厚く御礼申し上げます。永野和男会長をはじめとする理事の皆様には大所高所より会場運営についてご意見をいただきました。東原義訓大会企画委員会委員長をはじめ大会企画委員の皆様には、会場の調整および論文集の準備でお世話になりました。委員会を代表して深く感謝いたします。

本大会では470件の発表が行われましたが、そのうち102件はポスター発表であり、会場も大変にぎわっておいりました。第23回大会に導入されたポスター発表は大会にしっかり根付いたようです。

今年度は新しい試みとして、ワークショップを企画いたしました。実践は進んでいるものの研究として認識されていない問題や新しい情報技術の教育利用などの萌芽的な研究について9件のテーマが設定され、合計約200名の参加者により活発な活動や議論が展開されました。これらの経験が今後教育工学に新しい息吹をもたらしてくれることを期待しております。

会場校で企画させていただきましたシンポジウム2では、「変革をささえる教育工学：サスティナビリティとスケーラビリティ」と題して、教育現場の変革に関する持続可能性と普及の問題について学際的な議論が行われました。これらは教育の改善を志向する教育工学会にとっては本質的な問いであり、今年度25周年を迎える学会の今後を考える上で重要な議論ができたと思います。

インフルエンザの流行もあり、当初はどれだけの方にご来場いただけるか不安もありましたが、結果的に1,000名を越える方にお越しいただき、有意義な学術交流がなされるのを眼前にし、大会実行委員会一同喜びをかみしめております。

来年度の全国大会は平成22年9月18日から20日の日程で、名古屋の金城学院大学を会場に開催される予定です。今年度の大会で蒔かれた研究や人のつながりの種が、来年度の大会で大輪の花を咲かせることを祈念して、大会実行委員会からの御礼のご挨拶とさせていただきます。

本号目次

第25回全国大会の御礼	1	論文誌特集号のご案内（最終報）	15
第25回全国大会の報告	2	ショートレター増刊号のご案内（第二報）	16
研究会の報告	9	日中教育工学研究交流の報告	17
冬の合宿研究会のご案内（最終報）	10	FD研修会のご案内（第一報）	18
産学協同セミナーのご案内（第一報）	11	研究奨励賞の推薦依頼	18
論文種別の新設について	11	理事・評議会議事録	19
研究会の開催案内／発表募集	12	学会日誌等	20

日本教育工学会第25回全国大会の報告

大会企画委員会委員長 東原義訓（信州大学）

第25回全国大会は、9月19日（土）から21日（月）まで、東京大学本郷キャンパスを会場に開催されました。参加者数は1,020人、発表件数は470件（シンポジウム：12、課題研究：41、一般研究（口頭）：299、一般研究（ポスター）：102、International Session：16）という、大規模な大会となりました。

会場として、伝統ある安田講堂、工学部2号館、そして最新の福武ホールを使わせていただくことができ、記念撮影する会員の姿も見られました。山内祐平大会実行委員長をはじめとするスタッフの方々には、実にきめ細かな配慮で参加者を迎えていただき、気持ちよく発表や討論を行うことができました。関係の皆様は厚く御礼申し上げます。

今大会の特徴として次のことが挙げられます。（1）例年のシンポジウム、課題研究発表、一般研究発表、International Session、企業展示に加えて、大会実行委員会により初の試みとしてワークショップが企画・運営されました。（2）一般研究発表の口頭発表の時間がこれまでより短く設定されました。これは、それぞれのセッションの特徴をより明確化するという方針によるもので、短時間に多くの研究発表を聞くことができる口頭発表（一般研究）、個別に十分な意見交換ができるポスター発表（一般研究）、学会として取り上げるべきテーマについて、ある程度の発表時間と十分な討議の時間を確保する課題研究など、それぞれの意義が明確化されました。（3）今回の課題研究では、テーマを会員から広く募集して、それを踏まえて大会企画委員会が8件の課題研究を設定しました。（4）原稿提出時に発表者の方々にpdf化をご協力いただいたことにより、今回のCD-ROM版の論文集では、本文中の文字列検索が可能となり、今後の活用が期待されます。（CD-ROM版付きの論文集には在庫があります。購入を希望される方は、本レターまたは大会Webページの案内によりご注文下さい。）

また、これまでのノウハウの蓄積を基に、本大会を支える受付方法などをはじめとする全国大会運営マニュアル・Webサイトが、五反田事務局スタッフと清水康敬理事のご尽力でほぼ完成されたことも忘れてはなりません。事前・当日・事後の事務処理への御礼を申し上げますとともに、ここに記して、感謝の意を表したいと思います。

さて、大会1日目は、一般研究発表1（5会場）で始まり、午後には2つの並行シンポジウムと一般研究発表2（9会場）、夕方からはワークショップ（9会場）が催されました。各会場とも盛況で、活発な討論が繰り広げられました。初日から2日間の展示会には多くの企業等からのご協力をいただき、福武ホール地下2階のホワイエに多くの参加者が足を運び、企業の製品等にふれることができました。

大会2日目には、午前中に一般研究発表3のセッション（11会場）、International Session(1)（1会場）が催されました。一般研究の一部であるポスターセッションは、福武ラーニングスタジオで開催されました。この発表形式は今回で3回目を数え定着してきたと言えます。午後は、全体会とシンポジウム、懇親会というプログラムでした。全体会では、東京大学濱田純一総長のご挨拶をビデオにより賜りました。続いて研究奨励賞と論文賞の発表・表彰・受賞者によるプレゼンテーションが行われました。シンポジウムは、大会実行委員会が主体となって企画されたもので、登壇者のメールによる事前の情報交換と前夜の綿密な打ち合わせのもとに実施され、参加者から多くの感動の声が寄せられました。懇親会は、安田講堂に隣接する地下の中央食堂で開催され、会長や大会実行委員長の挨拶のほか、文部科学省をはじめとするご来賓の方からも、お言葉を頂戴しました。また、次回開催校の金城学院大学の長谷川元洋先生に、次回のご案内（9月18日～20日）をしていただきました。

大会3日目には、午前中に一般研究発表4のセッション（10会場）、International Session(2)（1会場）が、また午後には課題研究発表のセッション（8会場）が行われました。大会の最後を締めくくる課題研究セッションにも、数多くの会員が参加して、熱心な討論を繰り広げて下さいました。

大会論文集の購入について（お知らせ）

第25回全国大会の大会論文集（CD-ROM付）に残部があります。ご入用の方は、下記のいずれかの方法で7,000円（送料1,000円を含む）をご送金下さい。入金が確認され次第、お送りいたします。

(1) 郵便局備え付けの郵便振替用紙に記入してご送金下さい。

その際、送り先の住所、氏名を明確にお書き下さい。また、連絡のために電子メールアドレスをご記入下さい。郵便振替口座：「00180-2-539055」 加入者名：「日本教育工学会」

(2) クレジットカードでご送金下さい。

学会ホームページの会員専用ページの左側にある「入金確認」のボタンをクリックして下さい。パスワードが分からない場合は（office-s@jset.gr.jp）にご連絡下さい。

新型インフルエンザが懸念されるなかでの開催でしたが、大会実行委員会の万全な準備により、3日間を通じて成功裏に大会の幕を閉じることができました。ご参加いただいた会員の皆様とそれぞれの立場で大会の企画・運営にご協力いただいた方々に、厚く御礼を申し上げます。

なお、当日（第24回以前の大会を含む）、会場に忘れ物をされた方は、早めに大会企画委員会までご連絡下さい（9頁参照）。1月末をもちまして、お申し出のないものにつきましては、処分させていただくことを検討しています。

以下に、シンポジウム、課題研究のセッションの詳細とワークショップについて報告します（登壇者の敬称等は略します）。

シンポジウム1A：学習指導要領のスタートに向けて、「教育の情報化」のために教育工学は何をすべきか

コーディネータ・司会者：野中陽一（横浜国立大学）、東原義訓（信州大学）

報告者：黒上晴夫（関西大学）、中沢淳一、永野和男（聖心女子大学）、藤森裕治（信州大学）

本シンポジウムでは、「教育の情報化」の各要素が学習指導要領に埋め込まれ、「教育の質の向上」において重要な位置付けにあることを確認した上で、普及がなかなか進まない我が国の「教育の情報化」のために、教育工学は何をすべきか、何ができるのか、について検討した。

まず、永野は、情報教育と教科の学習活動との関係について分析し、教科指導でのICT活用に情報教育の目標が組み込まれ、情報教育との重なりが増えたことを示した。また、教育工学における実践研究が、研究者や実践者に役立つ知見と、それに基づいた具体的提言を行う必要性について述べた。黒上は、総合的な学習の時間の目標、内容に、情報教育が埋め込まれていることを示し、ICTの役割が、資料性、学習者による探究のツールであることを指摘した。そして、総合的な学習のカリキュラム、コンテンツの開発に教育工学が貢献する必要があると述べた。藤森は、教科教育「国語教育」の観点から、言語能力の育成に貢献するICTの効果的な活用事例を紹介し、教科教育と教育工学の専門的連携の必要性を主張した。最後に、中沢は、「教育の情報化」の手引き作成を担当した行政の立場から、教育の情報化による「教育の質の向上」が重要であること、全ての教員、全ての教科での日常的なICT活用をまず実現しなければならないこと、普遍性、普及方策、効果の明確化についてさらに研究を進める必要があることに言及した。

続いて、教科の目標達成と情報活用能力の育成を実現するカリキュラムの在り方について、諸外国のカリキュラム改革の事例等を含め協議した。さらに、こうした実践を普及、定着させるために必要なICT環境の在り方について、道具として、教材としてのICT、協同や相互作用を促すための情報環境の重要性が確認された。

最後に、教育工学が実践に貢献するためには、情報教育のカリキュラムやICT活用の普及を対象とした研究や、教科教育学を含めた関連分野と連携した実践的な研究がさらに重要になること、TPCK（Technological Pedagogical Content Knowledge）モデルにおける重なりの部分の研究を深めて行く必要があることを確認した。

シンポジウム1B：ICTを利用した教育・学習システムの目標設定と評価法

- 研究の「モザイク」から「るつぼ」への発展を目指して -

コーディネータ：柏原昭博（電気通信大学）、平嶋 宗（広島大学）、室田真男（東京工業大学）

司会者：平嶋 宗（広島大学）、室田真男（東京工業大学）

報告者：緒方広明（徳島大学）、向後千春（早稲田大学）、久保田賢一（関西大学）、大谷 尚（名古屋大学）

ICTを利用した教育・学習システム研究は、そのアプローチやゴール設定は多様である。従って、それらの成果を広く共有することは必ずしも簡単ではない。本シンポジウムでは、このような多様な研究の「モザイク」から成果を融合していく「るつぼ」への一つの端緒となることを目指して、教育・学習システム研究のいくつかの立場から、ゴール設定とその評価法について議論を行った。

まず、緒方は、自らの研究経験をもとに、システム開発には現場指向と技術志向アプローチの2つがあり、技術の横糸と現場の縦糸をうまく重ね合わせていくことが成功の鍵であることを述べた。

向後は、「授業感（思想）」→「ゴール設定」→「活動の設計」→「システムのデザイン」→「学習パフォーマンス」というプロセスにおいて、心理学ベースの研究者と工学ベースの研究者の立ち位置の違

いを指摘した。教育システムが教授学習プロセスのどこにどう影響したかという分析をし、蓄積された評価研究のメタ分析が必要であることを述べた。

久保田は、工学系開発者はハードシステム思考をもち、構造化された問題を扱い、最適な解決策を見つけることのみが課題となっていること、一方、実践者はソフトシステム思考をもち、構造化されにくい問題を扱い、何が問題であるのかおおよびどの様にその問題へ取り組むかの2つが課題となっていることを述べ、それらの違いが、問題や評価のとらえ方にギャップが生じる原因であることを述べた。

大谷は、ICT活用システム研究のためには、テクノロジー・プッシュよりリクワイアメント・プルが必要であること、論文のための研究から実効性あるシステム開発のための研究へのシフトが必要であること、成果に焦点化した評価から経過に焦点をあてた評価へ移行することが重要であること、「目標にとらわれない評価」が必要であること、テクノロジーとの関係に焦点を当てた教師・教職研究が必要であることを述べ、質的アプローチによる評価の重要性を主張した。

その後のディスカッションにおいて、教育現場からみるとツールは全体の大きな教育活動の中の一つのパーツに過ぎないが、技術者から見るとそのツールの効果のみを測りたいというギャップを認識してそれを埋める必要があること、日本のカリキュラム（学校文化・教師文化）に沿ってテクノロジーを活用していくことが重要であることを再認識した。さらに、教育現場と研究者をつなぐため、長期的な教育効果を評価するために、質的アプローチによる評価の可能性について議論を行った。

シンポジウム2：変革をささえる教育工学：サステナビリティとスケーラビリティ

コーディネータ・司会者：中原 淳（東京大学）

登壇者：木原俊行（大阪教育大学）、佐藤浩章（愛媛大学）、堀田龍也（玉川大学）、松下佳代（京都大学）

コメントータ：長岡 健（産業能率大学）、松尾 睦（神戸大学）

シンポジウム2では、教育現場の変革に関するサステナビリティ（sustainability：持続可能性）とスケーラビリティ（scalability：普及性）の問題を講演者、指定討論者、会場の参加者全員で考察する機会を得た。

サステナビリティとは、ある現場で試みられた変革が、外部からの介入をなくしても、自律的に維持されうることをさす。対して、スケーラビリティとは、ある現場で実施された変革が、他の現場に普及することである。近年、学習研究においては、このサステナビリティとスケーラビリティに、教育研究者がいかに向き合うかが問題になっている。

本シンポジウムは二部構成とした。第一部では、初等中等教育の実践研究を取り上げた。木原は、「カリキュラム・リーダーシップ」をいかに現場に結実するか、に関して報告した。堀田は、情報教育の推進を行う自身の実践研究を通して、学校現場・企業・研究者という3者のステークホルダーの調整が実践的研究の持続可能性と普及性のキーであることを指摘した。第二部では、高等教育を扱った。松下は、京都大学の高等教育センターが、学内・地域・全国・国際の4レベルでFDネットワーク構築と拠点形成を進めている事例を紹介した。佐藤は、「FDは研究か」というタイトルで、実践的な研究成果を持続させるための、人材育成やシステムづくりの実践を紹介した。

本シンポジウムでは、新たな試みを2つ導入した。ひとつめは、松尾（組織心理学）、長岡（社会学）という異なるディシプリンをもつ研究者をディスカッサントに加えたことである。両氏の鋭いコメントによって、4つの事例の違いが鮮やかに浮かび上がった。ふたつめは、携帯電話を使ったQ&Aである。20件近くの質問を取り上げることができた。

しかし、本シンポジウムの限りある時間では、変革の持続可能性や普及可能性に対して議論を尽くせたとはいえない。こうしたアポリアに対して、教育工学がいかに向き合うのかを、学問内部から折に触れ問い直すことは、学問の健全な発展にとって重要であると企画者は考える。

課題研究1：新しい技術・メディアを活用した教育支援システム：未来の学習環境のデザインとチャレンジ

コーディネータ・司会者：緒方広明（徳島大学）、竹中真希子（大分大学）

テクノロジーの進歩により、教育を支援するシステムも発展し、人の学びの方法の新たな方法が論じられてきている。本研究課題では、こうした新たな技術やメディアを活用した、未来の学習環境について、その可能性を検討した。合計で18件の応募があり、うち6件が採択された。

宮田（滋賀大学）は、携帯電話とGPSロガーを活用した、植物同定やGPS情報による観察マップ作成を

支援するシステムを紹介するとともに、教員志望学生らを対象に行った評価から、システムの有効性を示唆した。三浦（九州工業大学）は、アノト式の無線デジタルペンを用いて、学習者が筆記した内容を、教師が逐次収集できるシステムAirTransNoteについて紹介し、無線デジタルペンというメディアが学習の場にもたらす可能性について報告した。永野（鳴門教育大学）は、MTUI（マルチタッチユーザインタフェース）を使うことで、操作性のよさなど物理的な支援だけでなく、情報を提示する側と見る側とのインタラクションのしやすさにおいても、学習利用での利点があること、また、MTUIを活用した授業設計のためのモデルを提案した。鈴木（滋賀大学）は、動物園での学習を対象に、GPS付携帯電話を活用することで、学習者の位置情報や行動履歴に基づいた学習コンテンツを適宜提示するシステムLEGSについて紹介するとともに、提供したコンテンツが、学習者の素朴概念を科学的概念へと導いた事例を報告した。中澤（大阪大学）は、高精細な鏡像映像を用いた遠隔教育システムについて紹介し、遠隔学習における高い臨場感や同室感の効果など高精細映像の有効性を報告した。野村（埼玉大学）は、子育て体験プログラムがセットされた乳児ロボットを、高等学校家庭総合で活用した事例を報告するとともに、乳児ロボットの教材としての可能性や課題を示唆した。

全発表とともに、まだ現場では常時用いられていないテクノロジーが、有効に学習を支援するであろう未来への可能性を追究したものであった。全体討論では、テクノロジーの更なる進化と学習支援システムの開発の柔軟性に関する課題やコストについてなどが議論された。また、教育の専門家とテクノロジーの専門家が既存の技術やメディアを教育の領域に結びつけることの重要性についても提案がなされた。

課題研究2：協調学習を支援するシステム・実践のデザイン

コーディネータ：大島 純（静岡大学）、加藤 浩（放送大学）

司 会 者：舟生日出男（広島大学）、加藤 浩（放送大学）

本課題研究は、CSCLシステムとその実践のデザインを、デザイン原則にまで昇華させることを目指して企画した。13件の応募があり、その中から6件の発表が選ばれた。佐藤（東京大学）は、親子の物語作成において、子のNarrative Skill習得を促すような、親の語りの引き出し方の向上を支援するシステムについて、引き出し方が向上した親は、自身の引き出し方を反省し、目標を立てていたことを報告した。中俣（京都外国語大学）らは、日本語教員養成を目的とした学習環境（JapaS）について、日々の実習の営みをダイアリとして記録・報告し、教職員や学生など他者からコメントをもらう活動を通して、実習での問題点を解決できた様子などを報告した。出口（宇都宮大学）らは、他者の思考プロセスを活用したリフレクションを支援するコンセプトマップ作成ソフトウェアの活用を通して、自他のマップの相違点を指摘し他者の思考プロセスを吟味した上で、自己の思考プロセスの吟味に関する発話が多くなることを報告した。八重樫（立命館大学）らは、大学におけるPBLを支援するためのWebと携帯電話を利用したシステムについて、これまでの設計・開発を踏まえた上で、常に他者の作業が見えること、他者間の会話が自然に聞こえてくること、の2点に着目してデザイン・開発した結果を報告した。湯浅（静岡大学）らは、プロジェクト学習において、活動理論に基づいて用意された「足場掛け（記述を引き出すためのリード文）」が、プロジェクト活動における記録と評価を促進していることを報告した。館野（東京大学）らは、アカデミックライティングにおける協同推敲において、アンカードコメント機能によって、論理形式の構成要素の対応関係に着目した議論が行われていたことを報告した。全体討議では、なぜ協調学習の形態を採用するのか、システムによってある部分を可視化することで、逆に見えなくなる部分はないのか、協調を促進するための効果的なグルーピングの手法はあるのか、などの質問が出された。それらの問いに答えることが、CSCLシステムの開発や実践の中からデザイン原則を抽出するために重要な視点であることが確認できた。

課題研究3：ゲーム・シミュレーションの教育利用：現状とこれから

コーディネータ：栗山 健（学習研究社）、清水悦幸（内田洋行）、山田政寛（金沢大学）

司 会 者：山田政寛（金沢大学）

本課題研究では世界的に実践や研究が徐々に増えてきている、学習ゲームの開発やゲームの教育利用に関して、現状の把握から今後の活発的な学習ゲーム利用に向けた提案を行うために行われた。合計で8件の応募があり、そのうち4件の発表が選ばれた。光原（徳島大学）は小学生向けにPDAを使って、実際の現実環境とのインタラクションを通じて、二進数を勉強するゲームとイベントを設計し、評価した。評価では質問紙でも「楽しく勉強できた」という点も有意に伸び、成績も事後の方が伸びたという結果を報告した。池尻（東京大学）は歴史のカードゲームの開発とその実践を行った結果を報告した。歴史

を現在起こっている問題点と比較して、その解決策を見出していくことを目的としたものである。実際にゲームを利用している様子が映し出され、学習者が白熱した議論を展開し、ゲームに没入している様子を見ることができた。藤本（ペンシルベニア州立大学）は歴史学習システムにおけるエージェントの開発とその効果に関して報告した。具体的にはエージェントでも、物語性と学習者より劣ったエージェントを作り、歴史教育における効果検証をしたものであった。質問紙調査により、物語性がないエージェントがいるシステムと比較した結果、本実験のエージェントがいる群の方が「学習の楽しさ」や「関心の高さ」において有意に高いことが示されていた。遠藤（東京工業大学附属科学技術高等学校）は情報モラル教育ゲームの利用に関する発表であった。企業のモラルハザードにより、顕在化している問題を整理し、ストーリーを作り、演劇をさせ、リフレクションをさせる実践を行った。その結果、教員の介入が難しいこと、「モラルを守らなければならない」という方向への統制が難しいといった問題点があり、その解決のため情報モラルゲームの利用を提案した。総合討論では、ゲームを利用した教育効果の評価の観点としてどのようなものがあるのか、また教育現場で利用する場合の時間的制限とゲーム利用にかかる時間について、どのように目途を付けて行っているのかといった質問など出され、非常に活発な議論となった。普及という観点では気軽に利用できる開発環境、普及している利用デバイス上で動くゲームの開発が必要といった、開発環境の普及が学習ゲームの開発とその利用に必要なことが確認された。

課題研究4 授業研究と教師の力量形成

コーディネータ：柴田好章（名古屋大学）、田中博之（早稲田大学）、南部昌敏（上越教育大学）
司 会 者：田中博之（早稲田大学）、南部昌敏（上越教育大学）

本課題研究は、教師の力量形成における授業研究の可能性と課題を明らかにし、今後の指針を見出すことをねらいとして、設定された。9件の応募があり、5件が選ばれた。今野（東北大学）らは、黒板利用型の大学での授業を対象に、計画と実施結果の差異に着目し、授業者のリフレクションを促進する手法を開発し、その効果を明らかにした。澤本（日本女子大学）は、教員養成カリキュラムの中に授業研究を取り入れた自らの実践事例に基づき、冰山をメタファーにした実践知形成のモデルを提案し、学生が教師・児童の発話を分析した活動の効果を明らかにした。坂本（名古屋大学）らは、参加型の授業研究会における初任者と経験者の意見の比較を行い、経験者が特定の児童の言動を他の児童と関連づけてコメントしているという特長を明らかにした。細見（兵庫教育大学）は、学校内の授業研究会を活性化させるために、PDCAサイクルの授業研究会の方法を開発し、従来の方法と比較し効果を明らかにした。村川（鳴門教育大学）と田村（中村学園大学）は、カリキュラムマネジメントのモデルを教員研修のプログラムに援用し、ワークショップ型研修を成功させる要因を、事例に基づいて明らかにした。総合討論では、授業研究の活性化には、リフレクションのツールや、ワークショップの方法を適用することが効果的であることが確認された。一方で、「研修の成果を、いかに教師の内面に定着させるか」、「授業研究を1回限りとせず、持続的に発展させるためには、どうすべきか」、「参加する教師の意欲を高め、学校内で授業研究を推進する体制を、いかに構築するか」といった課題が示された。これらについて、「教師の成長をとらえるためには、長期的な見方が重要である」、「授業研究の参加者や授業者が、次の実践や研究に生かせる点を発表し共有することが、研修の効果を高め持続させるために有効である」、「充実したワークショップのためには、共通した課題意識が必要である」などの発言がなされた。また、引き続き学会として検討すべき点として、「自律的で持続的な授業研究が学校内で達成された後には、研究者の役割が相対的に小さくなると思われるが、そこでの研究者の役割は何か」や、「教師の成長をどのように測るべきか」という課題が提起された。

課題研究5：学校のICT化を推進する人的環境

コーディネータ・司会者：中川一史（放送大学）、野中陽一（横浜国立大学）

本課題研究は、教育の情報化を推進するための人的環境とその体制、役割等を含め、教育委員会・教育センターや学校、大学等の支援の在り方等に関する研究及び優れた事例を紹介いただき、それらの比較検討を通して、ポイントを協議した。5件の発表によって、情報化の統括責任者としての教育CIO、CIO補佐官の機能や役割、学校CIOとしての管理職の機能と校内の推進体制、学校における情報担当リーダーの役割、教員をサポートするICT支援員の学校での活用や教育委員会・教育センターの体制整備の在り方等、多様な視点から検討することができた。

五十嵐（日野市立平山小学校）らは、教育の情報化における日野市の戦略とICT活用教育推進室の役

割について、ICT活用指導力調査からみた成果と課題を報告した。垣内（西宮市教育委員会）は、人的環境の整備による学校ICT化へのアプローチについて、各学校のCIO補佐の役割が重要であることを報告した。樋口（NTT東日本長野支店）らは、ICT活用による授業改善を支えるサポート体制のあり方について、メディアコーディネータの役割の重要性などを報告した。松崎（神戸市教育委員会）らは、政令指定都市における大規模ICT環境整備と人的環境のあり方について、整備運営手法の転換の必要性などを報告した。ゼオースキ・スペンス（大阪大学）らは、米国における教育CIOに関する調査について、日本の教育CIOと米国の教育CIOの立場や役割等の違いについて報告した。全体討議では、事例から現状と課題を把握した上で、補正によるICT環境整備に備える戦略整備と推進体制、サポート体制を総合的に進めることの重要性が確認できた。また、本テーマに関する研究を深める必要性が指摘された。

課題研究6：eポートフォリオ ―初等教育から中等教育まで―

コーディネータ：小川賀代（日本女子大学）、永田智子（兵庫教育大学）
司 会 者：永田智子（兵庫教育大学）

近年、初等教育から高等教育を含めた様々な教育課程においてeポートフォリオの導入・活用が進められており、特に高等教育においては、学士力の評価等を始め積極的な活用がみられる。本課題研究は、現在のeポートフォリオの現状について多様な視点で情報共有する目的から今回初めて設定された。

前半の研究発表では、主として高等教育におけるeポートフォリオの開発・実践に関するものが5件行われた。森本（東京学芸大学）らは「eポートフォリオ管理」と「学習と評価の一体化」のトレードオフ問題を解決するためのシステムを提案・開発し、eポートフォリオの共有・再利用の支援について述べた。森山（兵庫教育大学）らは、教職大学院生の学習支援と多様な参加者とのコミュニケーションを実現するeポートフォリオシステムを開発し、活用状況、院生と教員の発言傾向の違いなどの分析結果を報告した。加藤（金沢大学）らは学生の授業アシスタント等ボランティア活動に特化して支援するWebノートを開発し、自主的な活用にもかかわらず、積極的な活用があったことと、より効果的となる改善案について報告した。谷塚（信州大学）らは教育実習Webポートフォリオにおけるリフレクションシートの記述内容をテキストマイニングの結果から教科毎の差異について述べ、教育実習改革に向けての示唆を行った。小川（日本女子大学）らは先輩の情報を参照できるキャリア支援を目的としたロールモデル型eポートフォリオの概要・実践について報告し、活性化を目指した拡張機能についても紹介した。

eポートフォリオは多用な分野で活用されているが、前半の発表は教職課程の事例が多かったため、後半の総合討議では、フロアから既に取組みを行っている大学から簡単に紹介してもらった。また、コーディネータより一般研究発表、他学会等でのeポートフォリオに関する研究・活用の動向が紹介された。続くフロアからの質問では、積み上げを必要とする理工系科目においても利用は可能か、情報の蓄積・検索・共有の問題についてどう考えるのか、などについて、フロアを交え熱心に討議がなされた。また、eポートフォリオの持続的活用と普及に向けて、リフレクションを含めたシステム・運用の在り方、成果の検証など今後の課題を認識することでセッションが終了した。本課題研究は、立ち見が出る程の参加者（約70名）があるなど関心が高まっており、今後の活用の広がりが期待できるものであった。

課題研究7：新学習指導要領における情報教育とICT活用

コーディネータ・司会：小泉カエ（尚美学園大学）、高橋 純（富山大学）

告示された新学習指導要領では総則において情報教育の重要性が謳われており、各教科の指導において児童生徒の情報活用能力を育成することが記されている。また、教員が授業でICTを有効に活用して「わかる授業」を実践することについても示されている。そこで、本課題研究では、新学習指導要領における情報教育とICT活用について、4件の研究発表で構成した。高橋らは、小中学校の新学習指導要領における教育の情報化に関する記述を抽出・分類し、ほぼ全ての教科において情報化に関する記述が見られたこと、教員のICT活用指導力のチェックリストに基づく記述の分類から特に授業中においてICTを活用して指導することが求められていることなどを報告した。山口（真岡中学校）は、技術・家庭科教員に対して、「ものづくり」の指導における効果的なICT活用について調査した結果、簡単な準備や操作で活用できる方法の評価が高く、個別指導の充実も図れるといった成果が得られていること、また、デジタルコンテンツも同様に評価は高いものの作成に手間を感じていることなどを報告した。小泉は、全国の情報科教員に対して調査をした結果、高校入学時に生徒に求める能力として「コンピュータの基本操作」「キーボード入力」などが高いことを示し、教科「情報」のそれぞれの授業内容において「授業で教えていること」「重要と考えていること」「指導する自信があること」の割合や、専任とそれ以外の

教員による意識の違い等を報告した。寺嶋（長崎大学）らは、ICT活用をした場面、意図や配慮点等について教員を対象に調査をした結果から、「機材設置・準備」「ICT活用による提示」「授業進行」「指示・説明」「事後作業」の5つのカテゴリからなる授業方略のリストを作成し、代表的な事例についてICT活用の意図を分析し、その異同を比較した結果等について報告した。4件の発表は、いずれも新学習指導要領に基づき情報教育やICT活用を実施する上での課題を明確にし、解決の道筋を示した発表であった。ディスカッションでは、基本的な操作スキルはいつ、どのように指導するのかをはじめとした情報教育の体系的な実施に関することや、教科指導での教員によるICT活用の普及に関することについて、カリキュラム開発、教材開発、システム開発、教員研修等を観点に活発な議論が行われた。

課題研究8：高等教育・FDにおける教育工学の役割

コーディネータ：石川 真（上越教育大学）、森田裕介（早稲田大学）
司 会 者：村上正行（京都外国語大学）、森田裕介（早稲田大学）

現在、FDの義務化や国際的な高等教育における質保証に関する議論が進展している。また、大学教育に関する情報共有も盛んになってきている。このような状況を踏まえ、本課題研究では、高等教育やFDの現状、実践的な取り組み、FDネットワークに関する6件の発表がなされた。

中山（東京工業大学）は、工学教育の事例を基に、大学教育の質保証システムのモデルを取り上げ、専門分野の領域固有性を考慮したFDや学生の満足度向上のための教授方法などにおける教育工学の役割について報告した。美馬（公立はこだて未来大学）は、学習の共同性と社会性を基軸にし、学生だけでなく教員も学ぶカリキュラムの「制度」と、学生や教員の活動が可視化された「空間」の両側面から、学習環境のデザインによるFDが可能であることを報告した。岩崎（京都外国語大学）らは、関西大学で行われているAS(Advisory Staff)と呼ばれる授業支援する学生などの活動による授業改善の事例や支援する学生にとっての学びの可能性について報告した。松本（青山学院大学）らは、青山学院大学のICTと実践研修を組み合わせたブレンディッド・ラーニングの取り組みについて紹介し、eラーニングのみや対面のための研修に比べて、有効なFDプログラムのモデルになり得ることを報告した。田口（京都大学）は、関西地区FD連絡協議会を事例としてFDネットワークには情報共有やリソースの省力化などの意義がある一方で、各機関の多様性における共同、連携のあり方の課題について報告した。村上らは、若手FD研究者にかかる業務負荷の増加や孤立などの実態を示し、その問題を解決するために活動している若手FD研究者ネットワークに関する報告をした。そして、若手FD研究者のなかでは、特に教育工学研究者が中核となり、他分野の研究者と情報の共有や連携を進めていく必要があると提言した。

以上の発表をもとに、各大学で抱えている問題を明らかにしつつ、多様な角度から検証し解決方法を見出していくことの重要性が議論された。そして、FD研究は、教育工学にとって比較的取り組みやすい領域であることから、本学会全体で支援し発展させていく必要があることが確認された。

ワークショップ

企画担当：大会実行委員会 山内祐平（東京大学）、椿本弥生（東京大学）

本大会では新たな試みとして実行委員会が中心となってワークショップを開催した。ワークショップは、参加者が設定したテーマについてインフォーマルに語りあう場として設定され、実践は進んでいるものの研究として認識されていない問題や、新しい情報技術の教育利用などの萌芽的な研究について公募により以下のテーマが設定され、合計約200名の参加者により活発な活動や議論が展開された。

- (1) International Workshop on Research and Practice of Advanced Learning Technologies
- (2) ラウンドテーブルディスカッション：「若き研究者の悩み～その研究・仕事・キャリア」
- (3) 学習障害を支援するマルチメディアDAISYの活用と展開
- (4) FDにおける教育工学と高等教育学のクロスロード
- (5) オンラインテストの回答行動に関するデータから得られるもの – 新しい研究の可能性 –
- (6) 障害を乗り越える（造形）ワークショップと身体・メディアの可能性：

光島貴之のタッチアート・ワークショップ– 見えない学びを見えるようにする

- (7) Moodleをさらにちょっと使いこなす
- (8) 学習環境デザイン
- (9) 学校図書館を活用した情報リテラシー教育を考える – 『know it all』を参考に –

参加者からは、「学会にとって重要であるにも関わらず研究という形式をとれないために取り扱いにくかったテーマについて本質的な議論ができた」「新しい研究につながる人のネットワークができた」

「今後も続けて欲しい」などの感想がよせられており、日本教育工学会全国大会の新しい発表・交流形態としての可能性が評価された。

以上、第25回全国大会について、報告いたしました。次回の大会に向けて、内容・運営等に関するご意見等は、大会企画委員会 (taikai2010@jset.gr.jp) までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

全国大会での忘れ物の取り扱いについて

毎回の全国大会では、少なからず忘れ物があります。大会実行委員会または大会企画委員会等にお問い合わせくださった場合には、すでに対応させていただいていますが、現在でも所有者の不明なものが残っています。

学会としての忘れ物・落とし物についての取り決めを定めていませんでしたので、これまでは、処分することもできず、以前の大会での忘れ物・落とし物をそのまま保管させていただいてきました。しかし、いつまで待っても持ち主が現れない現状もありますので、今後の扱い方を決定する予定です。

つきましては、過去の忘れ物・落とし物に心当たりのある方は、1月20日までに、大会企画委員会 (taikai2009@jset.gr.jp) まで、ご連絡下さい。照合に必要な場所、特徴等について確認させていただきます。

【忘れ物・落とし物の例】

・折り畳み傘、ハンカチ、文房具、書籍、論文集、レーザーポインタ、腕時計、電子辞書、MP3プレーヤなど。

日本教育工学会研究会

<http://www.jset.gr.jp/study-group/>

研究会の開催報告

●日時：2009年10月24日

●発表件数：23件

●会場：信州大学

●参加者数：49名

「ICT活用の授業研究と教師教育」というテーマで、平成21年度3回目の研究会を開催いたしました。初等・中等・高等教育や教員養成・研修における各種ICTを活用した実践等23件の研究発表が行われました。短期間での費用対効果が見えにくい教育分野ではありますが、教育工学研究の着実な蓄積からICT活用の必要性を実感できた日でした。発表者のみなさま、活発な議論に参加して下さったみなさまに深く感謝申し上げます。

担当：谷塚光典（信州大学）



2009年度 冬の合宿研究会のご案内（最終報）

■テーマ：教育現場とつくる実践研究のデザイン

新学習指導要領，言語活動の充実，教育の情報化，情報モラル，学校組織のマネジメント，学社連携など，教育現場をめぐる課題は，めまぐるしく変わりながら，かつ多方面に渡って山積しています。

これまで教育工学は，幅広く，教育実践における問題解決を志向する分野としてその成果を蓄積してきました。新しい指導法やテクノロジーの導入とそれらの効果検証，教師の力量形成，授業設計の方法論，現代的な教育課題への対応方法などが挙げられるでしょう。しかしながら，それにも関わらず，多忙な教育現場と研究者の間で継続的かつ密接な関係を築いて，実践研究を推進していくことは容易ではありません。

そこで本合宿研究会では，特に教育現場との密なコラボレーションのもとに研究を展開されている講師を招聘し，教育工学における実践研究のデザインやその方法を考えます。さらに学校，社会教育の現場の実践者と語り合う中で，実践研究をデザインし，実施していく際の問題点や教育現場が研究者に期待していることを共通理解し，実践研究の新しいテーマや方法の開拓を目指します。

■期日：2010年2月27日（土）・28日（日）

■会場：かんぽの宿 松島（宮城県東松島市野蒜字南赤崎89-53）

<http://www.kanponoyado.japanpost.jp/yado/matsushima/>

・車でお越しの場合

東北自動車道大和ICから松島経由で約30km（約50分）。または仙台南ICから三陸自動車道鳴瀬奥松島IC経由で約50km（約50分）

・電車でお越しの場合

JR仙石線野蒜駅から約1km（徒歩約15分または車で約3分）

■対象・定員：学校教育・社会教育に関わる研究者および実践者，学会関係者40名程度（定員に達し次第締め切り）

■参加費：15,000円（予定。内訳等の詳細は，後日JSETホームページ等にてご連絡します）

■申し込み方法：JSETホームページの「冬の合宿研究会」に関する部分

（<http://www.jset.gr.jp/study2/20100227.html>）より，申し込みフォームをご利用下さい。

■開催担当・問い合わせ先：稲垣忠（東北学院大学教養学部）

メール：100227jset@ina-lab.net 電話：022-375-1180（東北学院大学教育学準備室）

■プログラム（予定）

（1日目）

14:00 開会（13:30 受付開始）

14:10～15:00 基調講演「現代の教育課題と教育工学研究のデザイン」（日本女子大学 吉崎静夫教授）

15:15～16:00 実践研究の方法論の検討

※4つ程度のトピックを立てて研究者からの研究事例紹介と短時間の質疑を行います。

16:00～18:00 ワークショップ1

※さまざまな教育現場からの話題提供をもとに教育工学としての研究テーマ，検証方法をグループに分かれて討議します。

18:00～18:30 中間報告（ワークショップ1の成果報告）

（2日目）

09:00～09:30 ワークショップ2

※1日目の議論をもとに研究の骨子，期待できる成果をまとめて報告します。

09:30～10:45 発表（1グループ発表5分＋質疑5分程度）

11:00～11:55 パネルディスカッション

※2日間の討議を振り返り，実践研究として今求められること，有効な方法論，教育現場との関わり方等について討議します。

12:00 閉会

2009年度 産学協同セミナーのご案内（第一報）

■テーマ：「(続) 職業的専門性としての教育学」

今年度の産学協同セミナーでは、再度「人材育成」を取り上げます。大学で教育学を学ぶことのゴールは、研究者になることだけではありません。学習支援に関する理論や手法、教育システム開発・デザインのための実用的スキルを生かして、教育関連企業や社会において活躍することも、教育学を学ぶことの重要なゴールであります。

一方で、このように人材を育成して教育関連企業や社会に送り出すことは、大学や教育学という研究分野における社会貢献としての重要な任務の1つであり、その人材が企業で活躍できることは、日本の将来に対する大きな貢献になると考えます。こうした意味から、「教育学をベースにして働く人材」の育成は、まさに、産学が協同で取り組むべき課題ではないでしょうか。

本セミナーのシンポジウムでは、昨年度に引き続き、大学で教育学を学んだ後に企業や社会に入って活躍中の若手に多く登場してもらいます。加えて大学関係者、企業関係者を話題提供者としてお招きし、それぞれの立場から、大学における人材育成の理念と現状、企業における人材育成の現状と大学に求める点、教育学を学ぶこととキャリアメイクとの関連等について、語っていただきます。

指定討論、全体討論を通して、人材育成という視点からみた教育学の発展を、大学・企業の双方からどのように支えていけるかについて考えていきたいと思っております。教育学を専攻する学生諸氏、大学教員、大学関係者、企業において企画・開発に従事されている方、また、人事の関係者等、幅広い立場の方の参加をお待ちしております。

■日時：2010年3月19日(金)13:30～17:00（終了後に意見交換会の開催を予定）

■会場：内田洋行 東京ショールーム <http://www.uchida.co.jp/company/showroom/canvas.html>

■アクセス：東京メトロ 日比谷線「八丁堀駅」下車、「A4」出口より徒歩4分

東京メトロ 日比谷線・東西線「茅場町駅」下車、「1番」出口より徒歩5分

JR京葉線「八丁堀駅」下車、「B1」出口より徒歩5分

論文種別の新設について

編集委員会

「教育システム開発論文」と「教育実践論文」の論文種別を新設することになりました。

2009年1月からの投稿から受け付けますので、多くの投稿を期待しています。

教育システム開発論文

- ・ 教育の改善等を目的にして教育システムを開発していること
- ・ 既存の要素技術の組み合わせ方や方法に新規性があるか、あるいは、開発したシステムや要素技術自体に新規性があること
- ・ 開発したシステムの教育的な有効性を実証していなくても、教育システム開発論文として、この分野に関心を持つ会員や読者にとって価値と有効性があること

教育実践論文

- ・ 教育実践に貢献できる問題提起と意義があること
- ・ 学問としての教育実践学を構築していなくても、研究手法や道具の開発、要因の分析、実践の改善や学習環境づくり、教師の教育実践力について、新たな点があること
- ・ 教育実践研究論文として、この分野に関心を持つ会員や読者にとって価値と有効性があること

研究会の開催

研究会
2009テーマ **FD の組織化・大学の組織改革／一般**

●日 時：2009年12月19日（土）

●会 場：京都外国語大学（1号館6階）

（〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6）

●担 当：村上正行 (masayuki@murakami-lab.org)

プログラム

発表時間：発表1件につき25分（発表20分程度，質疑5分程度）

会場：A会場（151教室），B会場（153教室），C会場（155教室），D会場（156教室）

9:55-10:00 諸連絡

10:00-12:05 午前の部

- A1) 科目間のつながりから教員間のつながりをつくる学習支援の検討 長谷川紀幸（横浜国立大学）
 A2) 物理分野1年生を対象としたカリキュラム・デザイン実験 森朋子，雨森聡，山田剛史（島根大学）
 A3) カリキュラム改革に連動した体系的なFD 松本佳穂子（東海大学）
 A4) 教育改善を左右する学内関連組織間の情報流通 山地弘起，岡田佳子（長崎大学）
 A5) 学生生活支援システムによる教育改善への取組み

山田親稔，野口健太郎，兼城千波，濱田泰輔（沖縄工業高等専門学校），
 水野正志（長野工業高等専門学校），贄良則（ジャスミンソフト）

B1) 教師の指導力向上を目指した情報モラル指導教材の開発

玉田和恵（江戸川大学），松田稔樹（東京工業大学）

B2) ケータイ向け情報モラル教材の利用実態に関する調査

石原一彦（岐阜聖徳学園大学），石塚丈晴（静岡大学），堀田龍也（玉川大学）

B3) クリッカーと動画の同期システム Power Feedback NOTE を使った参加型授業の開発

酒井浩二（京都光華女子大学）

B4) 多肢選択式eテストにおける受験者認証法の検討－選択肢記号の筆記情報に対するDPマッチングの適用－

米谷雄介，松本守，古田壮宏，赤倉貴子（東京理科大学）

B5) Moodle の自由記述から抽出した特徴語の分析に関する研究

柏木肇（電気通信大学大学院）

C1) 中国語授業における字幕付き自己紹介動画作成の試み

坪田康，壇辻正剛（京都大学）

C2) 日本語学習に関する学習者ビリーフの考察－中国の大学生の調査からわかったこと－

ハリス未来（京都外国語大学大学院）

C3) 日本語学習者の発話に対する母語話者の理解

鹿内薫（京都外国語大学大学院）

C4) 中国人研修生・技能実習生の日本語習得に関する事例研究

小松麻美（京都外国語大学大学院）

C5) 日本語学習者の学習方略使用を促すEラーニング教材の開発

西谷まり（一橋大学），松田稔樹（東京工業大学）

D1) 技術科教員のデジタルコンテンツ活用に関する調査

鈴木織江，今井亜湖（岐阜大学）

D2) 普通教室における日常的なICT活用を支えるための教室環境の構築および活用の特徴

山田智之（内田洋行教育総合研究所），野中陽一（横浜国立大学），石塚丈晴（静岡大学），
 高橋純（富山大学），堀田龍也（玉川大学），畠田浩史（内田洋行），小柴薫（パワープレイス）

D3) CMS とモバイル端末を用いた新しい授業支援システムによる課題習得のための学習場面の検討

孕石敏貴（日進市立梨の木小学校），野村泰朗（埼玉大学），

林壮一（立教新座中学校・高等学校），島野誠大（立教大学）

D4) 社会ニーズに即したモデルベース開発の教育システム構築－高専間連携によるモデルベース開発教材の開発－

水野正志（長野工業高等専門学校），

野口健太郎，山田親稔（沖縄工業高等専門学校），與那嶺尚弘（仙台高等専門学校）

D5) 大学と社会をつなぐ体験学習の教育効果

酒井浩二（京都光華女子大学）

13:05-13:10 委員会挨拶・諸連絡

13:10-15:15 午後の部第一部

-
- A6) FD コンテンツによるオンライン授業参観のすすめ
新垣円, 半田純子, 本間千恵子, 齋藤長行, 野崎昭弘 (サイバー大学), 鈴木克明 (熊本大学)
- A7) 北海道教育大学における FD の再構築
瀬川良明 (北海道教育大学)
- A8) 徳島大学における FD 実施組織の発達過程に関する一考察—プログラムの実質化とセンターの役割に注目して—
香川順子, 田中さやか (徳島大学), 神藤貴昭 (立命館大学),
川野卓二, 宮田政徳, 曾田紘二 (徳島大学)
- A9) 授業改善コンサルティングに基づく大学授業支援システムの開発と評価
尾澤重知, 牧野治敏, 岡田正彦, 西村善博 (大分大学)
- A10) ファカルティ・ディベロッパーの ID 的基礎とは何か
鈴木克明 (熊本大学大学院)
-

- B6) 大学教員の自由記述回答からみた授業実施の視点と IT 研修による意識の変化
清水康敬 (東京工業大学), 苑復傑 (放送大学)
- B7) e ポートフォリオを活用した高等教育における教育改善・FD 活動の事例分析—米国カーネギー教育振興財団における取り組みから—
笹尾真剛, 酒井博之 (京都大学)
- B8) 大学教員のための教育研修支援システム「MOST」の開発
—マルチメディアポートフォリオを活用した FD・教育改善に向けて—
酒井博之, 田口真奈, 笹尾真剛 (京都大学), 大山牧子 (京都大学大学院)
- B9) 本学における ICT 利用の状況と課題
立野貴之, 安達和年 (松蔭大学)
- B10) 携帯電話への情報配信システム K-tai Campus2.0 の活用に関する検討
葉田善章 (放送大学)
-

- C6) 校務支援システム利用における運用要件と教員の負担軽減・校務の効率化に関する検討
山本朋弘 (熊本県立教育センター), 堀田龍也 (玉川大学), 新地辰朗 (宮崎大学),
鈴木広則 (スズキ教育ソフト), 清水康敬 (東京工業大学)
- C7) 学校 CIO の機能検討のための ICT 活用リーダーシップ調査 (3)
波多野和彦 (江戸川大学), 山路進 (日本私学教育研究所),
新地辰朗 (宮崎大学大学院), 坂元昂 (日本教育工学振興会)
- C8) 技術科初任教師を対象とした Web 型年間指導計画作成支援システムの開発
井戸康智 (岐阜大学大学院), 井ノ上憲司 (長崎大学), 今井亜湖 (岐阜大学)
- C9) 普通教科「情報」担当教員向け研修教材の開発
松田稔樹 (東京工業大学大学院), 石井奈津子 (芝浦工業大学)
- C10) 「子ども主体の学び合い」を支える教師の働きかけに関するモデルの検討
五十嵐亮 (九州大学大学院/日本学術振興会), 丸野俊一 (九州大学大学院)
-

- D6) 仮想空間探察と連動した VR 教材と携帯情報端末による学習環境の開発と評価
藤木卓 (長崎大学), 北原加保里 (長崎大学大学院), 寺嶋浩介 (長崎大学),
森田裕介 (早稲田大学), 竹田仰 (九州大学), 相原玲二, 近堂徹 (広島大学),
柳生大輔 (長崎大学)
- D7) 原爆を題材とした VR 教材を用いた科学技術的認識育成のための授業実践
北原加保里 (長崎大学大学院), 藤木卓, 寺嶋浩介 (長崎大学), 森田裕介 (早稲田大学),
竹田仰 (九州大学), 相原玲二, 近堂徹 (広島大学), 柳生大輔 (長崎大学)
- D8) 小中学校におけるよりよい問題解決のための見方考え方としての「計測制御」の指導方法の検討
野村泰朗 (埼玉大学)
- D9) スクラッチによるプログラムを対象とした受講者のエラー分析
高野辰之, 宮川治, 小濱隆司 (東京電機大学大学院)
- D10) リアルタイム課題提出システムの開発
長谷川伸 (東京電機大学大学院),
松田承一 (東京電機大学), 高野辰之, 宮川治 (東京電機大学大学院)
-

15:30-17:10 午後の部第二部

- A11) 学部を横断したシラバスのテキストマイニングの試み
中挾知延子, 平田謙次, 手塚洋一 (東洋大学), 佐藤史緒 (東洋大学大学院),
杉山憲司 (東洋大学), 荒川歩 (名古屋大学)
- A12) 大学教員を対象とした授業改善の現状と課題に関する調査
山田政寛, 末本哲雄, 青野透 (金沢大学)
- A13) ビデオ再生に同期させて行う授業評価システムのための評価項目の検討
殿村貴司 (東京理科大学大学院), 古田壮宏, 赤倉貴子 (東京理科大学)
-

A14) データ・テキストマイニングを活用した授業評価アンケートの分析とフィードバックシステムの開発
松河秀哉(大阪大学)

B11) 女子短期大学における CollabTest の活用ー理解を深める協調的な英語学習を目指してー
南紀子(創価女子短期大学)

B12) 研究室コミュニティ論の構築に向けてー研究室に関する参加, 移動, 創発のモデルー
辻高明(京都大学大学院)

B13) 説得段階の学校広報における情報再編集・要約機能
豊福晋平(国際大学)

B14) 費用対効果を強調することにより耐震補強工事への動機づけを高める教材の開発
田部井航太, 松田稔樹(東京工業大学大学院)

C11) 問題解決過程におけるメタ認知的知識の分析
寺嶋浩介, 小清水貴子, 藤木卓(長崎大学)

C12) 保育者養成課程における初年次教育に関する研究
中村恵(奈良佐保短期大学)

C13) 初年次教育授業におけるスチューデントアシスタントの活動評価
ー今後の活動の検討に向けての成果と課題のまとめー
遠海友紀(関西大学大学院), 岩崎千晶(京都外国語大学), 水越敏行(関西大学)

C14) 大学 e ラーニング課程における基礎学習スキルコンテンツの視聴状況
向後千春, 石川奈保子(早稲田大学)

●参加費用: 参加費は無料です。

研究会報告集の年間予約購読代金(3,500円)を支払済みの本学会会員以外の方は, 報告集代として1,000円を当日受付にてお支払い下さい。また, 当日受付にて年間予約購読の申込みも可能です。

●交通案内: 公共交通機関をご利用下さい。

【JR京都駅から】烏丸口から市バス28, 八条口から市バス71に乗車, 「四条葛野大路」下車(約30分)
地下鉄「太秦天神川」(「烏丸御池」で乗り換え)下車(約20分), 南へ徒歩約13分

【阪急西院駅から】市バス3・8・28・29・67・69・71で「四条葛野大路」下車(約5分), 徒歩15分

※詳しくは, 京都外国語大学Webサイトの「アクセスマップ」をご参照下さい。

http://www.kufs.ac.jp/kufs_new/about/accessmap_fr.html

●お知らせ: 昼食は, ご持参されるか, 大学周辺の飲食店をご利用下さい。

研究会の発表募集

テーマ: 教育実践を指向した学習支援システム/一般

●日 時: 2010年3月6日(土)

●会 場: 広島大学・東広島キャンパス(担当: 舟生日出男)

●申込締切: 2010年1月9日(土)

●原稿提出: 2010年2月6日(土)

●募集内容:

コンピュータやインターネットの発展・普及に伴い, これまで, 多数の学習支援システムが開発されてきております。そこで本研究会では, その中でも, 教育実践を指向した学習支援システムに焦点を絞り, そうしたシステムについての研究に関わっておられる方々の発表を募ります。教育実践の中で学習支援システムを活用して, 学習者の理解やスキル, 意識, 態度をどのように向上させることができるのか, システムの設計や開発, 活用, 効果など, 議論や情報共有を行いたいと考えております。また, 上記のテーマにはこだわらない教育工学一般における発表も幅広く募集しております。

●申込方法: 研究会Webページよりお申し込み下さい。

<http://www.jset.gr.jp/study-group/>

●原稿執筆: 締切後1週間以内に, 申込時に登録されたアドレスに発表の採択結果と執筆要項を電子メールにて送付いたします。

●原稿提出: 原稿の提出はPDF形式で, 研究会Webページの「発表申込フォーム」より, 発表申込時に発行された「受付キー」を使用してご登録下さい。期限までに提出いただけない場合は, キャンセルとさせていただきます。

*なお, このたびの研究会より, 年次大会の発表のルールに準じ, 個人がファーストオーサーとして発表できる件数は1件とさせていただきます。(連名での発表件数には制限はございません)

日本教育工学会論文誌 特集号 論文募集

「学習・教育支援のための技術開発論文特集」のご案内（最終報）

現在、学習・教育支援システムの開発研究では、多様化する情報通信技術を基盤とした新たな学習・教育支援の模索、及びWebテクノロジー、データマイニングなどの新しいソフトウェア技術を取り入れた質の高い学習・教育支援の実現が試みられています。また、新しい技術開発だけでなく、既存の要素技術を見直し、新しい活用方法を見出すことも盛んに行われています。今後、こうした幅広いアプローチのもと、有用なシステムが数多く生み出されてくることが期待されます。そこで、本論文特集号では、学習・教育支援のための技術開発に焦点を当てた様々な視点からのシステム開発論文を中心に広く募集します。

1. 対象分野

- (1) 新しい学習・教育支援技術の設計・開発（Webテクノロジー、データマイニングなどの利用）
- (2) 学習・教育支援のための既存要素技術の新しい組み合わせや新しい活用
- (3) 学習・教育支援システムのためのユーザインタフェース構築（認知的アプローチも含む）
- (4) 学習・教育支援システム評価技術
- (5) 学習・教育支援システム運用技術（LMS, 学習者認証, ポートフォリオ, インフラなど）
- (6) 学習・教育の質向上を目的とした要素技術・システムの開発
- (7) その他、学習・教育支援技術開発に関する研究

2. 募集論文の種類

通常の論文誌と同様に、「論文」「資料」「寄書」を募集します。投稿規程は通常の論文誌の場合と同じです。ただし、査読は2回限りとし、編集委員会が示した掲載の条件を修正原稿で満たさない場合は採録になりません。「ショートレター」として既に掲載されている内容を発展させ、「論文」として投稿することも可能ですが、単に分量を増やして詳細に説明しただけでは発展させたことになりませんので、ご注意下さい。「教育システム開発論文」が新設されることになりましたので、この論文種別での投稿も期待しています（本レター11頁を参照）。

なお、本特集号の対象分野外の論文が投稿された場合は、一般論文として扱うこととなりますので、あらかじめご了承下さい。

3. 論文投稿締め切り日（2010年11月発行予定）

投稿原稿を2月8日までに電子投稿をお願いします。ただし、2月15日までは、論文を改訂することができます。締め切りの延長は行わない方針です。

投稿原稿提出締め切り（電子投稿）：**2010年2月 8日(月)**

最終原稿提出締め切り（電子投稿）：**2010年2月15日(月)**

4. 論文投稿の仕方

原稿は、「原稿執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html>)に従って執筆し、学会ホームページの会員専用Webサイトから電子投稿して下さい。郵送による投稿は受け付けませんことになりました。

5. 問い合わせ先

電子メール：tokushu2010@jset.gr.jp

Tel/Fax：03-5740-9505 日本教育工学会事務局

6. 特集号編集委員会

委員長：柏原昭博（電気通信大学）

副委員長：渡辺健次（佐賀大学）

幹事：松浦健二（徳島大学），

長谷川忍（北陸先端科学技術大学院大学）

委員：伊東幸宏（静岡大学），

植野真臣（電気通信大学），加藤泰久（NTT），

国近秀信（九州工業大学），

小尻智子（名古屋大学），小西達裕（静岡大学），

佐々木整（拓殖大学），

竹内 章（九州工業大学），仲林 清（放送大学），

林 敏浩（香川大学），

林 雄介（大阪大学），東原義訓（信州大学），

平嶋 宗（広島大学），

松田憲幸（和歌山大学），松原行宏（広島市立大学），

宮田 仁（滋賀大学），

宮寺庸造（東京学芸大学），室田真男（東京工業大学），

吉川 厚（教育測定研究所），

渡辺博芳（帝京大学）

ショートレター増刊号論文募集のご案内（第二報）

日本教育工学会論文誌 vol. 34, Suppl. の発行

論文受付締切：2010年4月1日（木） 編集委員会事務局必着

日本教育工学会論文誌vol. 34, Suppl. は、年1回発行されるショートレターの増刊号です。投稿規程及び原稿執筆の手引きを参照の上、奮ってご投稿下さい。ショートレターの採録条件は、Vol. 27より以下になりましたのでご注意ください。（詳細は、JET117号参照）

1. ショートレターは、刷り上がり4ページ厳守です。（4ページを超えるものは採録しない）
2. ショートレターでは、筆頭著者（ファースト・オーサー）は本学会会員であることが条件です。あるいは、筆頭著者が投稿時に入会手続き及び会費納入等を行うことが必要です。なお、各会員は本ショートレターを年1偏に限り投稿できます。
3. 2010年12月に発刊の予定です。

ショートレターの内容については、例えば、以下のような内容が考えられます。

- ・全国大会や研究会で発表した内容をまとめたもの
- ・教育実践をベースにした実践と知見をまとめたもの
- ・教育システム開発など
- ・教育工学研究としての速報的な内容
- ・卒業論文や修士論文等としてまとめた内容、など

なお、ショートレターで掲載された内容を、研究的に発展させまとめて、論文採録の条件を満たすと思われる内容は、学会論文誌に投稿することができます。

ページ数が限られていることから、タイトル、著者、内容については十分厳選の上、ご執筆下さい。

特に、ショートレターの趣旨から、多人数の連名著者はさけて下さい。研究全体がプロジェクトチームによる共同研究であっても、実際にショートレターの限られた内容に直接携わり、執筆した研究者にしてくださいようお願い致します。

ショートレターの査読日程予定(2010年度)：

- 4月中 担当及び査読者の指名
- 5月 編集委員会で査読進捗状況の確認
- 7月 編集委員会で採録、返戻の第1回決定
- 9月 編集委員会で採録、返戻の第2回決定
- 10月 最終原稿の提出
- 11月 著者校正
- 12月 増刊号発行予定

論文投稿の仕方：

原稿は、「原稿執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html>)に従って執筆し、学会ホームページの会員専用Webサイトより電子投稿して下さい。投稿論文は電子投稿でのみ受け付けています。

問い合わせ先：

電子メール：short@jset.gr.jp

Tel/Fax：03-5740-9505 日本教育工学会事務局

日中教育工学研究交流の報告

第3回中日教育工学研究交流フォーラムは、本年8月7日(金)～8日(土)の2日間にわたり中国・東北師範大学(長春市)を会場にして開催された。日本からは坂元昂先生を団長に総勢8名が参加し、中国側代表8名と交互に質疑応答も含め一人が40分～50分間にわたって研究発表した。下表はその発表プログラム



であり、写真は開会行事直後に基調講演を行なう坂元先生と通訳者である。中国教育技術協会情報技術教育專業委員會の会員230余名を前に両国を代表して、坂元、何両先生が基調講演を行ったが、教育工学の世界規模の現状分析にもとづいて将来の展望が述べられた。2日間に双方から最新の研究成果が計14件紹介された。二日目には2つの分科会に分かれて研究発表が続けられ、より活発な質疑応答が行なわれた。今回の開催に当たっては、赤堀前会長が2月に中国側と話し合い、以下の条件が履行された。

- ① 渡航費は参加者の自己負担とするが、滞在費(ホテル代、食事代、移動費)はすべて中国側の負担。
- ② 日本側発表は日本語で行なうが、それを中国語で逐語通訳。プレゼンコンテンツは事前に中国語に翻訳し、順次スクリーンに拡大投影。発表論文は中国語にも翻訳し、論文集に掲載。

なお、本学会ニューズレター『JSET NO. 153, pp. 11-12, 2007』と本学会『第25回全国大会講演論文集, pp. 923-924, 2009』に本フォーラム開催等の経緯の概要が報告されている。

	発表者	所属	発表題目
7 日 午 前	坂元 昂	教育工学振興会	教育工学の現状と将来展望
	何 克抗	北京師範大学	21世紀以来教育技术理论与实践的新发展
	近藤 勲	岡山大学	教職大学院専用遠隔教育研究指導システムの構築とその活用事例——岡山大学の場合——
7 日 午 後	李 克东	華南師範大学	应用数字化认知工具促进知识建构的实验研究
	南部昌敏	上越教育大学	eラーニングを活用したICT活用指導力育成のための教員研修
	王 珠珠	中央電化教育館	中国中小学教师教育技术能力建设计划及成效
	山西潤一	富山大学	教育の情報化推進に向けた管理職のための戦略的ICT研修
	黄 荣怀	北京師範大学	如何有效设计在线学习活动——技术与教育的对话
8 日 午 前	解 月光	東北師範大学	虚拟学习社区学习者交互研究
	张 剑平	浙江大学	視線跟踪技術及其教育应用
	松居辰則	早稲田大学	早稲田大学人間科学部におけるe-learningの実践と評価
	遠藤康俊	旭市立鶴巻小学校	児童の豊かな心と確かな知を育むICT活用による国際交流学習の実践事例報告
8 日 午 前	小柳和喜雄	奈良教育大学	学部から大学院につながる体系的な観察実習の方法に関する研究
	大久保昇	(株)内田洋行	民間教育研究所と教育工学
	李 艺	南京師範大学	教育管理信息化功能标准研制
	徐 晓东	華南師範大学	信息技术教师教育课程改革与教学方法创新的实践

第8回中国教育技術国際フォーラムが8月18日(火)～19日(水)に江蘇省の徐州師範大学で開催された。ここでは新会長の永野先生が招待をうけ「Information Literacy in a Knowledge Based Society」の表題で講演を行なった。国外からの招待者は、日本、米国、英国からの3名であった。会場には、中国の教育工学や情報教育の中心的メンバーが集まったほか、翌日の質疑・応答のセッションでは、若手研究者や教育工学専攻の大学院生の発言が目立ったとのことである。今後の中国の発展が期待される。

大学教員のためのFD研修会（ワークショップ）のご案内（第一報）

趣旨：この研修会は、日本教育工学会がこれまでの知見を活用し、大学教育の授業改善や教員の授業力向上への寄与しようと、昨年度から実施されているものです。大学教員をはじめ、大学教員を目指す学生や学校現場教員、指導主事等を対象としています。本研修会の修了生には学会より認定書を発行し、本研修を受講したことを証明します。

企画：日本教育工学会FD特別委員会（委員長：村川雅弘）

テーマ：「教育から学習の時代へ」

日時：平成22年3月21日（日）

会場：港区立高輪台小学校（港区高輪台2丁目8-24）品川駅から徒歩8分

定員：40名（申し込み着順で、定員になり次第、締め切ります）

講師：織田揮準（皇学館大学教授、三重大学名誉教授）

講演題目「授業改善から学習改善へ～大福帳の活用を中心に～」

参加費：2,000円（学会員）、3,000円（学会員以外）

認定書：研修会終了後に最終レポートを提出した修了生には、日本教育工学会から認定書が授与されます。

世話人：村川雅弘（鳴門教育大学）、黒上晴夫（関西大学）

申込み：http://ks-lab.net/haruo/JSET_FD/index.htmlにアクセスしてお申し込み下さい。平成22年3月12日まで受け付けますが、定員に達した時点で受付を終了いたします。

研究奨励賞候補者をご推薦下さい

第25回全国大会（東京大学）の研究発表者の中から、研究奨励賞の候補者を下記の要領でご推薦下さい。

発表をお聞きになっていない場合でも、論文集をご参考をお願い申し上げます。

選考の基準

1. 選考対象者は、本学会の会員であって、受賞時に40歳を越えていないこと。ただし、本学会入会時から5年を経過していない場合は考慮する。
2. 選考時点から遡って最後の年次大会での正式の研究発表登壇者であること。
3. 既に研究奨励賞を受賞している者でないこと。
4. 対象者の過去の研究業績を尊重すること。

注：研究奨励賞（1985年10月31日 理事会申し合わせ）

「研究奨励賞は、教育学および関連領域に関する学問の奨励のため、有為と認められる新進の研究者に贈呈する。この奨励賞を受ける者は、本学会会員であり且つ研究大会において講演を行った中から、優秀な論文を発表した者から選定する。」

なお、理事・評議員・大会役員・座長担当者の方は率先してご推薦下さいますようお願い申し上げます。

★締め切りは、12月31日（木）とさせていただきます。

（推薦用紙は、20頁に掲載しております）

第13期第4回理事・評議員合同会議・議事録

日時：2009年09月20日(日)12:30～13:40

場所：東京大学法文1号館 2階 215号室

出席：(理事) 永野和男会長，永岡慶三副会長，山西潤一副会長，赤倉貴子，植野真臣，大久保昇，小柳和喜雄，木原俊行，澤本和子，三宮真智子，清水康敬，南部昌敏，東原義訓，堀田龍也，前迫孝憲，宮田 仁，向後千春，村川雅弘，室田真男，矢野米雄，山内祐平，吉崎静夫
(評議員) 石塚丈晴，稲垣 忠，浦野 弘，大谷 尚，加藤 浩，久保田賢一，黒田 卓，鈴木克明，園屋高志，高橋 純，中原 淳，中山 実，野中陽一，長谷川元洋，美馬のゆり，柳沢昌義
(監事) 生田孝至，近藤勲

1. 第13期第3回理事会議事録が承認された。

2. 各種委員会報告について

(1) 編集委員会

清水委員長より，教育システム開発論文/教育実践論文の評価について(案)が示された。検討を進め，来年1月投稿分からこの方針で進めることが承認された。

(2) 大会企画委員会関連

東原委員長より，第25回全国大会はスムーズに運営されている旨の報告があった。また，山内実行委員長より，9月20日11:00現在，事前申込682名，受付通過906名の報告があった。

(3) 事務・総括

山西副会長より，25周年記念の学会ロゴ募集に関する要項の提案があり，種々意見交換の後，募集要項の一部修正等をした上で，Webとニューズレターで募集することとなった。

3. その他

1) 後援依頼2件，広報依頼5件が確認された。

2) 来年度の全国大会は，2010年9月18日(土)-20日(月)に金城学院大学で開催。

3) 第5回理事会は，11月28日にCIC708号室で開催。

4. 評議員からの意見・提言

出席の評議員，監事から次のような意見及び提言があった(一部のみ掲載)。

- ・論文の法令違反等に対する学会としてのガイドラインを設ける必要がある。
- ・研究会の発表内容の質に低下が見られる。
- ・開発論文，実践論文，のほかに，調査論文をどう位置づけるかの検討が必要である。
- ・スクール・ニューディールに関して，当学会からの提言を示す必要があるのではないか。
- ・論文集の電子化，報告集の電子化をさらに進めたい。
- ・ポスターセッションで開発物のデモができるようにするとよい。
- ・他の学会との開催日調整を検討したい。
- ・学会としての財産を学会活動の活性化にどのように活用したらよいか検討を要する。

以上

